

西日本正教

西日本主教教区宗務局

No.137

Winter, 2015

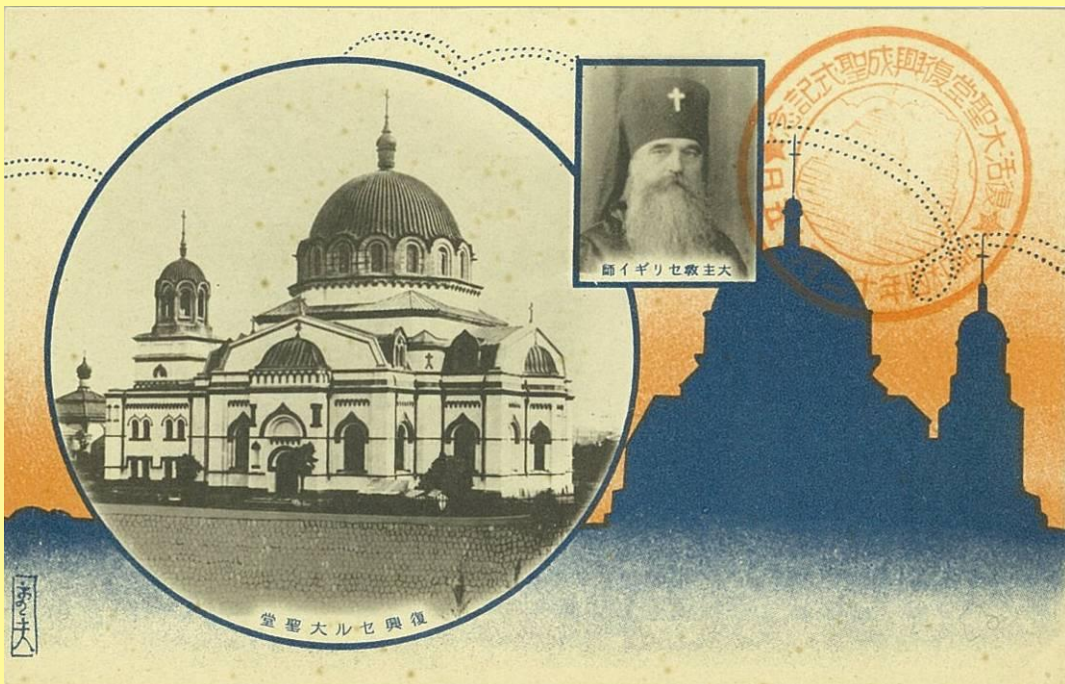
604-0965 京都市中京区柳馬場二条上る六丁目 283

京都ハリストス正教会 内

e-mail : ocj_kyoto@yahoo.co.jp

電話・FAX (075) 231-2453

郵便振替 01030-5-18547



復活大聖堂復興記念絵葉書（昭和4年12月15日）

ラフマニノフと正教会



2015年 **2月11日** (水・祝) 10:30~15:00 会場 **大阪**ハリストス正教会
「徹夜祈(晩祈)に見る正教会聖歌の歴史」 (マリヤ松島純子 マトシカ)
「ラフマニノフと正教会」 (マトフェイ土田定克兄 第3回ラフマニノフ国際ピアノコンクール第1位受賞ピアニスト)

二月十一日(祝日)、大阪教会で西日本主教区主催冬季セミナーが開催されました。今年は「ラフマニノフと正教会」をグラウンドテーマに、午前の部は名古屋教会聖歌指揮者マリア松島純子姉が「ラフマニノフの『徹夜祈(晩祈)』」から見る、ロシア正教会聖歌千年の歴史」と題して講演を、午後の部は尚綱学院大学准教授で気鋭のピアニスト、仙台教会で聖歌指揮者としても奉仕するマトフェイ土田定克兄による、お話を交えてのラフマニノフのピアノ曲コンサートでした。

教区宗務局ではロシア出身の名高い作曲家、敬虔な正教信徒であり我が国でもよく知られているラフマニノフがテーマであれば、広く正教会外の方々にも正教を知っていただく絶好の機会ととらえ、早くから関西の音楽関係の大学、友好団体、合唱団などにチラシを送り、積極的にPRにつとめました。その結果、百三十名近い参加者の内、六十四名が外部からというかつてない規模の「外部宣教」行事となりました。また東京復活大聖堂、横浜正教会などからも参加者があり、さらに土田兄の友人で香港のロシア正教会の管轄司祭ディオニシイ神父夫妻も参加し、大変にぎやかな顔ぶれのイベントとなりました。

午前の部の松島姉は、ラフマニノフの代表的



宗教曲「徹夜祈(晩祈)」を構成する各曲が、ロシア聖歌が西洋音楽の影響を強く受ける近代以前の聖歌に基づいていることを、「徹夜祈」と古聖歌を実際にCDで聴き比べ、スライド映写もまじえて解説。また「聖三の歌(聖なる神)」を取り上げ、地域と時代によってロシア聖歌がどのように変遷してきたかを実際に耳で聞いて確かめました。そして、その豊かな多様性を貫いて、どの地域、どの時代の聖歌も「教会がハリ

1	「来れ、我等の王、神に叩拜せん」 "Приидите, поклонимся"	創作
2	首唱聖詠「我が霊よ、主を讃め揚げよ」(103聖詠/104詩編) "Благослови, душе моя Господа"	ロシアのギリシア調
3	第1カフイズマ第一番「悪人の謀」 "Блажен муж"	疑似チャント
4	「聖にして福たる」 "Свете тихий"	キエフ調
5	「主宰よ、今爾の言に循ひて」(ルカ2:29-32) "Ныне отпущаеши раба Твоего"	キエフ調
6	「生神童貞女や慶べよ」 "Богородице Дева, радуйся"	疑似チャント
7	小頌栄、六段の聖詠「至高きには光栄神に帰し」 "Слава в вышних Богу"	ズナメニイ(大頌栄から)調
8	ポリエレイ「主の名を讃め揚げよ」 "Хвалите имя Господне"	ズナメニイ調
9	復活の5つのトロバリ「主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠めを我に教え給え」 "Благословен еси, Господи, научи мя оправданием Твоим"	小ズナメニイ調
10	「ハリストスの復活を見て」 "Воскресение Христово видевше"	疑似チャント
11	生神女讃歌「我が霊(心)は主を崇め」 "Величн душа Моя Господа"	疑似チャント
12	大頌栄「至高きには光栄神に帰し、」 Великое славословие: Слава в вышних Богу.	ズナメニイ調
13	定規のトロバリ「今救いは」(1、3、5、7調のとき) "Пропеть воскресный в неделю: "Днесь спасение миру бысть"	ズナメニイ調
14	定規のトロバリ「爾は墓より」(2、4、6、8 調のとき) "Пропеть воскресный в неделю: "Воскрес из гроба"	ズナメニイ調
15	コンダク「生神女や我等爾の僕婢は」 "Возбранной воюводе"	ロシアのギリシア調

ストスに結ばれた交わりとして神の国へ向かって力強く進んでいく」というイメージを伝えていること、聖歌はいわば「信仰のアイコン」であることが強調されました。講演の最後には、大阪教会で日本語の祈禱文を当てはめたラフマニノフの「生神童貞女や慶べよ」が大阪教会聖歌隊の方々のリードで、参加者全員で唱和されました。



バフテメフの聖歌集→
同じものの日本語版↓



午後の部で土田兄はまずラフマニノフが、ロシア革命による激動と混乱、そして様々な新潮流が音楽界にブームを巻き起こしていた時代に、それらに共鳴する多くの人たちの冷たい評価と対応に屈することなく、「伝統の継承の内にある『愛や苦しき、悲しみや宗教的な心境』を自身の音楽の内実として誠実に追求し



たことを、熱い共感をもって紹介。その後、彼の楽曲をいくつか取り上げて、そこに「鐘の響き」やロシアの伝統的聖歌、さらに「怒りの日」のテーマなどキリスト教信仰と関わる様々な要素が、どのように密かにまたあらわに組み込まれているかを、実際の演奏を交えて熱く語ってくださいました。締めくくりは彼の最後のピアノ曲、彼が終生追求した、人は何のために、どう生き、どう死ぬかという問いへの答えとも言えるべき「コレルリの主題による変奏曲」を全曲演奏し参加者たちを深い感動に



包み込みました。アンコールにもお応え下さり、午前の部の最後に全員で歌われた「生神童貞女や慶べよ」、そして「元氣いっぱい」の「プレリュード変ロ長調作品 23-2」で、締めくくりました。今回の企画に快く応じてくれた土田兄、またいつもながら献身的にご協力してくださった大阪教会の皆様にご心よりの感謝をこめつつ、報告を終えます。(ダオルギイ松島記)



西日本教区センター建設工事

京都 長司祭 パウエル 及川 信

教区センター基本構想

新たな建物は、教区の主教座教会、教区の宣教・牧会の核（センター）としての機能。百人収容可能なホール、事務所、福祉対応バリアフリー・多目的トイレ、エレベーター、図書・資料室、地元京都正教会の信徒会館としての機能。司祭館、主教館、納骨堂を併設します。

教区センター 建設案 概要

一三年秋、設計・施工監理者として喜多隼紀一級建築士を選任。喜多建築士は第二回委員会より素晴らしい建造物をめざし建設委員と共に精励され、一四年五月には基本設計がまとめられました。RC造地上三階建耐火構造、建築面積約四二九㎡、延床面積約七五七㎡、総事業費は約一億六千五百万円を予定しており、私たちは「建設募金（献金）」をいま募集しています。



教区センター建設募金中間報告
多くの方々のご協力に心より感謝
申し上げます。

5,460,100円
(2015年2月9日現在)

建設計画承認

一四年六月、司祭会議が提案した計画案（原案）を、理事会・教区会議が承認。ダニイル府主教座下の祝福を得、七月、教団責任役員会・総局会議、京都正教会信徒総会・責任役員会など、それぞれの正式承認と主教品の祝福を得て計画が具体化。八月には施工業者選定のため、三社による入札が始まりました。



施工業者選定 正式名称決定

一四年九月一八日建設委において、慎重審議の結果、(株)創真建設を選定。このあと工事日程案・工程案・旧会館取り壊し解体のお願い、施工業者に創真建設を推薦する旨などの諸書類を急ぎ教団に送付。ダニイル府主

教座下より、祝福を賜りました。新たな会館の正式名称は「西日本教区センター」に決定。

着工前の事前準備

九月下旬、旧会館の電気関係・配電盤・聖堂火災警報機等の移設、近隣への挨拶、二九日旧会館取り壊し・解体、十月六日駐車場整備・工事用出入口（通路）開設工事。その間、二日には、創真建設との打ち合せ、さらに電気関係移設・外灯、工事用安全防護柵等を設置。



起工式（着工祝福式）

一〇月二二日（水）
午前十時、水口師・松田輔祭、喜多建築士、創真建設関係者、佐藤孝雄執事長、佐藤道雄聖歌指揮者はじめ十八人が参集、心をこめて祈禱。「亜使徒聖ニコライに依頼する祈禱」（感謝祈禱）、聖水散布、祝

辞（ダニイル府主教座下、代読及川）、式辞（佐藤孝雄執事長）、鍬入（喜多建築士・創真建設・佐藤執事長）。「幾歳も」斉唱。工事関係者の安全無事、各教会・信徒の皆様のご健康と幸福を祈念しました。

基礎成聖式

一月から順次、基礎関連工事が始まりました。同時に建築資材の値上りなどの諸事情を勘案し、工費の節減・精査、各業者との協議、聖堂火災警報機・通報機の移設・新設などが続きました。また1階ホールに記念聖像を設置すべく、いま検討準備を進めています。一二月七日（日）主日聖体礼儀後、基礎成聖式を挙行。多くの皆様の信望の証である教区センターの無事完成を、みんなで祈念いたしました。ホームペー「京都市・九州正教」において写真で工事経過を紹介しています。ぜひご覧ください。完成は、来春五月、成聖式は六月二二日（日）の予定。皆様の御参拝をお待ち申し上げます。「夢をかたちに、信仰を歩みに、創造を力に」

名古屋 神現聖堂 成聖五周年記念祭 フォトリポート

名古屋教会は西日本主教区の協賛を得て、一月二四日〜二五日にかけ、府主教ダニール座下をお迎えし成聖五周年を祝い、完成の後にも神現聖堂名古屋教会に変わることなく注がれる至聖三者、神の恩寵に感謝を献げました。教区からは豊橋の酒井神父、神戸の後藤神父が御陪祷されました。神戸教会、大阪教会、京都教会、半田教会、豊橋教会からも信徒の皆さんがかけつけてくださいました。

二四日には夕方五時から徹夜祷、その後、府



徹夜祷



子供たちも一緒に

パンと塩、花束もって



祝賀会

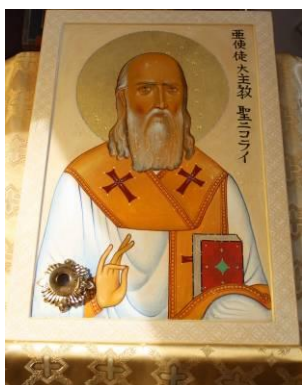


ご挨拶



→記念写真撮影を待つ

不朽体嵌入↓



領聖を見守る↓

主教座下を囲んで夕食会、翌二五日は九〇近い参拝者を集め、府主教座下のご司祷による聖体礼儀が献げられました。聖体礼儀の最後には、昨年松島神父夫妻がグルジアを訪問した際、アイコン画家ラーシャ・キンツレシユビリ兄から献納された亜使徒聖ニコライのアイコンに聖ニコライの不朽体が嵌入されました。

また最後の十字架接吻に際し府主教座下から、ロシアで製作された生神女誕生祭のアイコンが名古屋教会に献納され、参拝者には小型の板アイコンがプレゼントされました。

ふだん府主教座下のご司祷の聖体礼儀に参拝

する機会があまりない名古屋教会の信徒たちは、自分たちのためにお忙しい中おいで下さった府主教座下に深い感謝の思いを抱きました。多くの信徒が、領聖の時じっと王門の下で両手を十字に重ね、自分たちの領聖を見守って下さった府主教座下の姿に胸を打たれたと語っていました。

祈祷後は、集会室で立食式で祝賀会。くつろいだ歓談の合間には新聖堂成聖後の5年間の活動をスライドショーで振りかえり、またこの間に帰正式・洗礼機密を受け光照された信徒の皆さんが紹介されました。

教区「学びの会」開催

豊橋・松島神父
「おいしいから」



10月18日、名古屋教会のゲオルギイ松島神父が、クリスマスチャンにとって「食べる」こととは、どのような意味を持つことなのかについてお話し下さいました。9月23日に福井市の日本キリスト教団城之橋教会で行われた講

演会の内容を踏まえたものです。

プロテスタント教会では、主日礼拝の中心は説教であり、正教会の聖体礼儀にあたる聖餐式については、比較的頻繁に行う教会でも月1回、通常は年に3・4回、極端なところではクリスマスだけという例もあります。それに対し正教会では司祭巡回教会は別にして、通常は毎主日必ず聖体礼儀が行われ、主の尊体尊血が信徒によって分かち合われています。この違いは何に由

来するのかがというのがテーマでした。神父はハリストスは最後の晩餐で「取りて読め」ではなく「取りて食らえ」と命じたのであって、正教会はそこにこめられている、ハリストスの救いのわざによる神と人との交わりの回復によって、食べ物かふたたび神の人への愛の贈り物へと回復したという「福音」の本質を忠実に伝え続けている、聖体礼儀に参拝するならば、信徒はその恵みを進んで受けなければならないと呼びかけられました。

大阪・酒井神父

「イコノスタスの向こう側」

去る11月15日(土)大阪直教会で、西日本主教区「学びの会」が開催されました。講師は豊橋正教会のイサイヤ酒井神父で、テーマは「イコノスタスの向こう側」と題し、毎週行われる日



曜日の聖体礼儀で司祭は至聖所で何をしているのか、至聖所とはどのような場所なのか、話されました。奉獻礼儀や聖パン

の記憶、また連祷の合間に祝文を読むことなど、参拝していても見たり聞いたりする事のない司祭の仕事に、15名の参加者は、皆、興味をもって聞いていました。質疑応答でも多くの質問があり、盛会のうちに閉会しました。

名古屋・水口神父

「降誕福音を読む」

クリスマス記念市民講演会

12月23日(天皇誕生日)、名古屋教会は大阪教会のダヴィド水口優明神父を講師に迎え、「クリスマス記念市民講演会」を開催しました。本企画は、西日本主教教区の「教区定例学びの会」が名古屋で開催されるのに「相乗り」して、広く市民に正教を知っていただく機会としたものです。PRのためにカラー刷りのチラシを制作し(二千部)、中日新聞社、キリスト新聞などの行事案内に掲載を依頼し、日頃交流のある他教派の教会にも、チラシを置いてもらうことをお願いしました。ちなみにカラー印刷チラシの制作費は千部で二〇五〇円でした。「オンデマンド印刷」の業者に頼めば、内部でコピー印刷するより遙かに安価に美しい印刷物が短納期で手に入ります。

PRのかいあったのか、当日は予想していたより遥かに多く27名の来聴者がありました。そのうち一〇名は一般からの参加者で、中日新

聞の宗教欄の行事案内を見てという方が五名もいました。「五名しか」とネガティブに考えず今後も、同様の企画、PR活動を続けていきたいと思えます。

水口神父のご講演タイトルは「降誕福音を讀む、正教会の伝統に基づく聖書講解」。ルカ伝の



二章一節から二十節までをギリシヤ語原文に遡っての語句の解説の後、聖師父の解釈、祭日経の祈りの言葉、降誕祭のアイコンを手がかりに丹念に解説してください。神父の「正教への愛」に溢れる熱っぽい語り口で、二時間があったという間に過ぎました。

特に、「いと高きに光荣神に帰し、地には平安降り、人には恵み臨めり」(ルカ2:14)という私たち正教信者には耳になじんだ箇所が、他のほとんどの翻訳では「地では、御心になう人々に平和が」という意味合いで訳されている「謎」について、翻訳の底本が依拠する写本の違いで解明し、正教の翻訳こそが、神の恵みが「御心になう人々だけではなく」すべての人々へ及ぶ絶対的な普遍性を正しく伝えていられるというお話は、圧巻でした。

北九州伝道所・後藤神父

「ハリストスの体としての教会」

1月12日(月・祝)、北九州の伝道所(福岡)にて教区主催「学びの会」が開かれ、「ハリストスの



の体としての教会」という題で後藤神父が話をしました。9名の方が参加され(啓蒙者の方も一名おりました)、熱心に耳を傾けていらっしやいました。

永遠の記憶

8月14日、ニコライ堂のパウエル松井神父様が勤務中に心臓発作を起し、16日にご永眠されました。47才の若さでした。葬儀は18日、19日にニコライ堂で行われました。神父様は二〇〇四年から二〇〇七年の間、神戸教会に伝教者として奉職されていきました。その後神父様は、ニ



コライ堂で輔祭、司祭へと叙聖され、ご活躍なさっていました。永遠の記憶をお祈りいたします。



ダニエル府主教座下に、着座15周年を記念して、西日本主教区の司祭より「杖」を贈呈いたしました。2月4、5日に開催された神品研修会の折りにお渡ししました。

グルジアで思ったこと

名古屋教会司祭 ゲオルギイ松島雄一

昨年、九月グルジアを訪問した。グルジアの親日家のアイコン画師ラーシャ・キンツラシヴィリ氏が名古屋教会へ献納するために制作して下さった「亜使徒聖ニコライ」ほか計三点のアイコンの受け取りが主目的である。もちろん、それだけではない。グルジアは世界で最初に正教国となった(338年)伝統的なキリスト教国である。多くが六世紀にまで遡る教会、修道院が目白押しだ。名古屋教会のザウリ兄が二年ぶりの里帰りを私たちの旅程に合わせてくれ、トビリシ在住のザウリ兄の兄、ズーラ兄とともに毎日精力的に各地を案内してくれた。だから書きたいことは山ほどあるが、ここでは二つ三つ正教徒として「思った」ことをお話ししたい。

昨年、十月二十一日に来日したグルジア大統領マルクヴェラシヴィリ氏が、日本でのグルジアの正式国名表記を「ジョージア」に変更して欲しいと求めたことは、記憶に新しい。

この背景には彼らの複雑な対ロシア意識がある。「グルジア」は「ジョージア」のロシア語表記なのである。

グルジアはその地政学的な位置から千年以上にわたって入れ替わり立ち替わり他国の支配に屈しなければならなかった。その間、彼らの民族的なアイデンティティを支えたのが正教である。十九世紀初めからのロシア帝国支配のもと

トビリシの街角 ぶら下がっているのは伝統的なお菓子



で千八百十一年教会は独立教会の地位を失いロシア教会の傘下に入る。当然ロシア教会の慣習や教会芸術の影響を強く受ける。世界最古の正教国、そこでつちかわれた伝統に強い誇りを持つ人々にはこれは「屈辱的」であった。そのよう

な時代がソ連崩壊で実質的に終わった時、教会文化の面でグルジア教会本来の伝統復興の動きが始まった。

ロシア教会のもとにあった時代に設置された何段にもアイコンを積み重ねた木造の豪華なロシア風アイコンスタスが、一段だけ取り替えられた。その上、アイコンスタスの板アイコンや聖堂内壁のフレスコ・アイコンも、グルジア教会独特の素朴で親しみやすい画法で描かれたものに替えられた。この動向は現在も続いており、ラーシャ兄のアイコン工房もきわめて多忙である。

聖歌もソ連崩壊後、長くロシア聖歌の影響下に埋もれていた伝統的なグルジア聖歌が再発掘され、古い資料や歌い継がれた民謡などを参考に再現され、いくつかの教会で歌われるようになった。グルジアの人たちはそれを「世界最古の多声音楽」と誇る。西ヨーロッパで成立した和声法の原則にとられない、西方の和声法では「不協和音」と呼ぶほかない独特の響きが、人のたましいの最古層に眠っている神への原初的なあこがれを目覚めさせ、かきむしる。アイコン画家ラーシャ兄宅での私たち歓迎の宴では、私たちのために兄の友人でグルジア聖歌の発掘と普及に取り組むマルコ兄らのグループが招かれ、その響きを間近に体験できた。また日曜日はマルコ兄らが聖歌を歌う聖父ダヴィッド教会で聖体礼儀に陪祷させていただき、石造りの堂内でその響きに酔った。

もうひとつ何度か招かれた「筵は豊盛なり」(復活祭の説教)とはこれかと心躍る、民族料理が山盛りのグルジア流の宴会でも、教會的な発見をした。

グルジアの宴会に欠かせないのがタマダと呼ばれる宴会進行係である。たんなる司会者ではない。客人が一人でも宴会の楽しさから疎外されないようにたえず気を配り、もし酒癖の悪い人が宴会の楽しさを台無しにするようなら、つまみ出す権威も持つ大事な役割である。大きな宴会でタマダをつとめるのは大変な名誉だという。

このタマダの重要な仕事に「トースト」の指

名がある。「トースト」とは日本で言えば乾杯の音頭取りだ。グルジアでは原則的にトーストがなされないと飲めない。飲みたくなっても次のトーストを待たねばならない。宴会が始まるとまず最初に、タマダが自らちよつとしたスピーチを前置きに「神のために…」と杯を上げる。みなが一斉に飲み干す。しばらくしてやおらタマダが立ち上がり、次のトーストを席次の一番上の客に指名、今度は「救い主ハリストスに感謝し…」、このように次々に席次の順に指名して行く。何か連想しないだろうか。

グルジア最初の宴会はラーシャさん宅での歓迎会だったが、宴が進む内に私はハタと手を打った。まずそもそも最初に宴会の部屋に通された時、どこに座ればよいのかと、戸惑っている、縦に長いテーブルの、日本で言えば一番上座の席の左隣に椅子が引かれており、ホスト(タマダ)であるラーシャ兄がここに座れと示す。「えっ」と思っていると、タマダは日本では一番上座、縦長に置かれたテーブルの正面席に座ったのではないか。そしてそこから次々とトーストの指名をして行くのだ。

アッ、主教祈禱と同じだ！ 正教の主教祈禱では連禱や、祈りの最後で「けだし」と高声を上げる部分は司禱者である主教が指名する。そうだ、小さな聖体礼儀がここにある、私はそう合点した。ここでは世俗の宴会は聖体礼儀を象っている。逆に聖体礼儀も世俗の宴会の象りであるともいえるのだ。聖と俗の隔ては、そもそもハリストスの十字架と復活によって始まった新しい時においては、もう取り去られている。

6世紀にさかのぼる聖堂

日常の食卓は、主の晩餐が行われる宝座という聖なる食卓につながっている。その新しさにクリスチャンは生きていることを、人々はここで体験的に知るのである。だてに「最古の正教国」なのではなかった。



素朴な味でぐいぐい飲めるグルジアの家庭ワインのなせる、少々思い入れの強すぎる感想だったかもしれない。

最後はグルジア正教会の総主教イリヤ二世聖下のことだ。聖下がアメリカ正教会を訪問された時にお目にかかったという親しい神父が「すばらしい靈性のお方

でした」と絶賛していた方だ。もしお目にかかれる機会があればと、心密かに期待していたのを見通されてか、現地の人たちが奔走して調べてくれた。残念ながら聖下はちようど地方を巡回中でお目にかかれなかった。しかし神父や修道士たちだけではなく、一般の信徒も口を開けば、「イリヤ聖下を知っているか？もうお目にかかったか？」と尋ねてくる。その尊敬と愛の熱さは並大抵のことではない。どんなお方かと尋

総主教イリヤ二世聖下



して行くにあたって、その任のために必要な心得として、今も人々が折に触れて想起する

ねれば、決して威張らない、謙虚で、愛に溢れた「お父さん」だと皆口をそろえて言う。グルジアの光照者亜使徒聖ニーノ(ニーナ)が永眠した地を訪問した際、その地の女子修道院でお目にかかった修道院長テオドラ師がこう話してくれた。

ソビエト政権から解放され、信仰の自由が取り戻された時、グルジアには活動している女子修道院は世界遺産の古都ムツヘタのサムタブロ修道院のみだった。イリヤ聖下はそこに修道女たちを集め、女子修道院をこれから各地に再建

「三原則」を示した。

- 1, だれをも裁いてはいけない。
- 2, もし誰か姉妹があなたを咎めたら、弁解しようとして、彼女にゆるしを乞い、そしてそこを立ち去りなさい。
- 3, お互いの内に神が与えた聖なる美德をさがし、誠実にそれをたたえなさい。もしそうできないなら、何も言わずにいなさい。

「そしてそこを立ち去りなさい」、「何も言わずにいなさい」…。
何という知恵だろう。

昇曙夢（直隆）先生（承前）

ニコライ神学校の前後

和田芳英（昇曙夢研究者）

目 ニコライ神学校時代の読書体験

明治四五年一月号の雑誌『文章世界』に掲載された昇曙夢の「研究と翻訳の十ヶ年」の文章は、二葉亭四迷なきあとわが国におけるロシア文学の翻訳および紹介の第一人者となるまでの過程を示す重要な資料として注目される。この文章のなかで自己の読書体験を具体的な作品をあげてつぎのごとく記している。

「ブシキンの有名な処女作である「ルスランとリュドミラ」といふ二人の浪漫的な恋を謳つて小説を韻文でいつた様な長詩の如きが其最初の深き印象であつた。私は殆ど暗誦する迄に読んだ。ツルゲーネフの「獵人日記」や「散文詩」に魅せられたのもその頃である。然し在学中私の最も深き強き感激はゴーゴリの上にあつた。ゴーゴリの作品よりも彼の生涯といふ方面、殊に彼の悲劇的な晩年に私は当時堪らなく同感してつて、随分熱中したもので、分る分らないは兎に角、彼の全集をはじめ彼に関する書は大抵悉く読んだ。ゴーゴリ評伝は此の時に書いたもので、丁度その頃発行された正教青年会の機関雑誌「使命」に先づ連載された。」

昇曙夢はロシア文学の母ともいえる文豪ゴーゴリに熱中していたのである。特にゴーゴリの「タラス・ブリーバ」などは昇曙夢の文学開眼

のきっかけをなす作品であつた。

「あの作品は十五六世紀頃のウクライナの困厄時代に於けるコザックの平時の生活と、戦時の武者振りとを作者の感激に満ちた、深刻として、躍動する筆で描いたものであるが、作の背景としては詩的な南露ウクライナの自然と生活と風習と、またそれ等を圍繞する曠野の美とをまみり入れて、恰も小露西亞の民謡調子をそのままに伝へたもので、到る処に叙事詩的、若しくは叙情詩的絶唱と云つてもよいものが見出される。かう云ふ作品であるから、これを読んだ人は、念頭に深い印象を刻まれて、永久に忘れることが出来なくなるのである。」（何人をも感激せしめる「タラス・ブリーバ」）『世界文学月報』昭和二年一月一五日発行

ゴーゴリの生涯と芸術に熱中した曙夢はゴーゴリが狂うがまゝに自らの原稿をことごとく積んで焼き払つた晩年の悲劇に共感し不眠の夜を体験している。青年期特有の人生に対する煩悶や不安にかられて、精神的興奮のあまりある時など極度の神経衰弱に陥つて、無意識のうちに寄宿舎を飛び出し、一晩中鎌倉の由比ヶ浜をさま

迷い教職員や同窓生をひどく心配させたという。

昇曙夢の青春時代は彼の自伝にもあるように「その頃は恰度明治文化の黎明期を受けたロマンチズム思潮の全盛期で、多くの青年が理想と感激とに燃え立つてゐた時代である。



一方からは何か高遠なもの、偉大なものへのあこがれから宗教熱が盛んに勃興し、他方からは個性の目覚めからニーチェの個人主義的思想が高唱せられ歓迎された時代で、思想界は将にきよう狂ひよう颯時代を現出してゐた。その頃の青年が徳富兄弟や内村鑑三、綱島梁川、高山樗牛、森鷗外、坪内逍遙、稍々後れて上田敏の諸先生に傾倒してその著作を耽読した頃の感激は今日では想像も出来ないほどである。謂はゞ最初から無批判に感激し、熱中し、驚嘆するといつた風だつた。」（「研究と翻訳の五十年」）（古稀の齢を迎へて）「こちなみに雅号の「曙夢」は内村鑑三纂訳の詩集『愛吟』（明治三十年七月、警醒社）巻頭にそえられたアルフォンソ・ラマーティンの頌詩（詩は英雄の朝の夢なり）から着想したものである。

マ 神学校卒業後の昇曙夢

明治三六年七月、七年間の学業を終えた昇曙夢は、ただちに母校の講師に就任。論理学・倫理学・心理学を担当。あわせて『日本』（くが陸かつ掲なん南主幹）新聞社に嘱託として採用されロシア事情の翻訳と紹介に従事している。文筆活動と研究生活に専念する環境を得て在学中に蓄積した広範な知識を直截に発揮できる能力と才能を備えていた。さて、昇曙夢の正教神学校の教師時代のエピソードを語る二、三を紹介したい。

教え子のひとりである五年下級生のイアコフ真鍋頼一の回想するところによると「その頃は未だロシア語からの直截反訳でロシア文学が紹介せられていなかった。（僅かに二葉亭があつた

が)先生は神学校卒業はやはやではあったが既に二三のクラシック露文学の紹介や小説の翻訳を出版しロシア文学者として、そろそろ名を売り出していられた。私の記憶では当時の神学生の中にはロシア文学熱が相当高く、何かの会の余興などでも必ずロシアの劇が学生によって演ぜられたものであった。ゴーゴリの「レヴィンル」などはしばしば上演した。(和田注・露語による劇の上演は東京外語よりも正教神学校の方が早かった)勿論貧弱な舞台装置や衣装などは殆ど用いないで劇そのものの筋を二幕三幕やつた。昇先生はそんな時は一番さきに立って指導したり説明したりしたことを思い出す。「(昇先生の想いで)『正教時報』第八二九号、昭和三十一年一月五日)

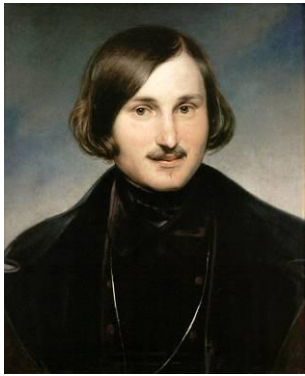
また、後年ロシア社会思潮の研究者になった高野孤龍(槌蔵)は指導者としての曙夢の一面を捉えて「先生は面白い行き方の教育家である。それとなく子供を大人扱ひにして、遂に大人にしてさふ。露語の教科書で論理学を教授されてゐたが、途中それにはお構ひなく、ジョン・スチュアート・ミルの思想に就いて連続講話をされたことがある。およそ詳細に亘つたもので、碌に解らなかつたことだけ記憶してゐる。でもそれに刺戟を得て、後から社会思潮を研究する気になった。」(余香(人として・先生として)「若い頃から昇曙夢は博覧強記であつた。」)

◀ 文豪評伝『ゴーゴリ』を出版

文豪評伝『ゴーゴリ』は正教青年会機関誌『使命』誌上に明治三五年四月号から三七年四月号にかけて執筆したものをまとめて六月に『ゴー

ゴリ』のタイトルで春陽堂から上梓された。本邦初のゴーゴリに関するまとまった評伝である。当時の文壇はいまだ近代思潮の流れをみず、硯友社の全盛時代であり、わずかに小杉天外の写真主義が産声をあげたばかりであつたから、ロシアの写実主義乃至自然主義の紹介をすればならぬかの反響があるものと期待して取り組んだ著作であつたが、さしたる反響もなく葬られたと慨嘆している。(ただ瀬沼夏葉の師匠であつた尾崎紅葉は『使命』連載中の「ゴーゴリ評伝」を面白く読んでいた。ある日紅葉は昇曙夢の寮室を訪ねている。)

この処女著作について昇自身は「今から見ればほとんど読むに堪えない幼稚な文章であるが、当時のわたしとしては感激のあまり書いたもので、懐かしい思ひ出の一つである。」「わたしは「ゴーゴリ」が単行本として出た時、すぐにその一冊を師の膝下に贈呈したが、師は非常な満足で、「これ、いゝ本です。よく書きました、もつと勉強しなさい」と言つて、いきなりポケットから拾円札を取り出して「これ上げます」と、わたしの手に握らせた。わたしは非常に嬉しかつた」と述べ恩師ニコライ大主教の激励に感謝している。



昇曙夢の『ゴーゴリ』が刊行された当時のわが国の文壇では、嵯峨舎主人は已に文壇を去り、二葉亭氏の「片恋」や魯庵氏の「罪と罰」の出たのも前の事で、

当時露国物の紹介が一時わが文壇に途絶えて居た姿であつた時に、幾分なりとロシア文学の面影を伝えて居たのは「裏錦」や「使命」であつた事を記憶したい。(昇曙夢「研究と翻訳との十周年」)

昇曙夢の生涯と芸術に深い理解を示し家族ぐるみの親交を結んだ相馬黒光は「その頃正教女子神学校の人達によつて文学雑誌「裏錦」が発行され、稍々後れて男子神学校の人達によつて「使命」が発行されてゐました。「文学界」其他が表とすれば、「裏錦」は読んで字の如く裏にたとへられるかも知れません。/まだ世なれない楚々たる処女の姿にも似たる雑誌は、その内容に於てあなどり難いものがあり、別派の文士たちも、心ひそかに恐れをなしてゐました。/昇先生は、已にそのころから「裏錦」、主として「使命」に筆を執つてゐられて、今日に至る四十幾年の間、たゆまず倦まず孜々としてロシア文学の紹介に努力を続けられたことは、今更改めて喋々を要しません。/然し、ロシア文学は、日本の国では、いつも継児扱ひをうけて素直に成長することを妨げられて来た薄幸児であります。先生が、この間にあつて、云い知れぬ苦杯をなめ、目に見えぬ圧迫にたえつつ、黙々としてこの薄幸児を守り育てられたその心境と態度は、恰も殉教者に等しい気高さと尊さを感じさせます。」「先生は終始一貫して、ロシア文学の研究と紹介に、勇敢な歩みをつゞけて生きぬかれたことに自ら頭が下るのを覚えます。(「ロシア文学の大元老」昇曙夢還暦記念『六人集と毒の園—附文壇諸家感想録—』正教時報社)と述べている。

各教会ニュース

鹿児島 子供クリスマス会

12月13日(土)午後、鹿児島聖大致命者イアコフ聖堂において、平之町あいご会と共催の「ファミリークリスマス」を開催。主の降誕の紙芝居、クリスマスソング合唱、子供自作のクイズやゲーム、サンタクロースのプレゼント、キャンドルサービスなどに興じました。参加子供四〇人、大人二七人。(及川記)



人吉聖堂増改築工事はじまる

14年3月の信徒総会において、人吉生神女庇護聖堂の全面的改修・増改築工事の実施が決議されました。築後八十年以上も経つ聖堂は老朽化著しく、懸案となっており、わたしたちは、過去二十年に亘りこつこつ献金を集め、ようやく資金約一千三百万円を得ました。その献金には故セルギイ藤平重信師が教団に寄贈した水上村山林売却益が含まれます。ダニイル府主教座下祝福のもと、先年、由縁深い人吉正教会に売却益約七百万円が献金されたのです。施工は一四年十月〜今春までの予定。



監理、山上建築。いわゆる新築そっくりさん、ほとんど新築にも近い工事で、聖堂本体ばかりでなく、境内整備にも力を入れます。とくに聖堂は一新され、参拝者に歓喜と魅力を体感させる祈祷の場となります。聖堂内はバリアフリーにも配慮。トイレは男女共に洋式、正扉は正教会の聖堂らしく西側に配置、台所・物入も新調。緒方俊一郎執事長を委員長に改修工事の成功と募金募集に全力を傾注しています。12月14日(日)には、基礎成聖式を執り行いました。来年秋十月には成聖祈祷に合わせて教区行事開催も企図。完成までもうひと息。皆様の御理解・御協力を心よりお願い申し上げます。(及川記)

広島信徒集会

11月24日(月・祝)に、ホテルグランヴィアの弥山の間において、恒例の広島信徒集会が開催されました。参加者は5人と少なかつたものの、パニヒダ祈祷の後、来年永眠七〇年を迎えるセルギイ府主教についての講話に耳を傾けました。(水口記)



金沢祈禱集会



11月24日、
金沢のアンナ
小谷綾子姉、
故ナデジタ大
呂緑姉のご厚
意で開設し毎
年集会を持つ
てきた金沢連
絡所の祈禱室
で、名古屋の
松島神父の司
禱で聖体礼儀

が行われました。

参加者はロシア系の方々7名、求道・啓蒙者
3名を含めて15名でした。

毎年行っている金沢ロシア人墓地での墓地祈
禱は、残念ですが、天候の関係で中止されまし
た。

聖体礼儀後はテーブルを囲んで楽しい語らい。
日本語のほか、ロシア語、英語が飛び交い、時
を忘れました。

いつもながらお弁当のほかに手作りのおいし
いケーキやおかずでもてなしていただき、ご自
宅を金沢連絡所をご提供して下さいっているアン
ナ小谷綾子姉に感謝いたします。(松島記)

神戸教会バザー



今年も神戸
教会では11
月23日(日)
にバザーが行
われました。
信徒の方や近
隣の住民の方
から物品を献
納して下さい
ました。今年
はピロシキ、
ペリメニ、ポ

ルシチ、シヤシリツク、ケーキセット等のフ
ードが特に好評で閉店30分前には売れ切れてし
まう程でした。(後藤記)

大阪教会バザー

10月26日(日)に、大阪教
会で恒例のバザーが開催され
ました。今年も物品よりも食
事に重点をおいたバザーとな
りました。秋の青空のもと、
たくさんの方々が溢れ、聖
堂にも一般の方々が多く訪れ、
教会の歴史などの説明に熱心
に耳を傾けました。(水口記)



名古屋教会バザー



11月1日
(土)、お昼を
はさみ恒例の
バザーを開催。
インターナシ
ヨナル・フー
ドバザーも地
域に定着し、
楽しみにして
いた近所の皆
さんを中心に、
大勢の方が来

会。あいにくの雨で出足を大変心配しましたが、
開場するや次々押し寄せる皆さんに、心配は一
挙に吹き飛び、楽しくも、おおわらわの2時間
半でした。(松島記)

大阪教会敬老会

9月21日(日)、お天気
にも恵まれて二十四名の
人達が大阪教会の敬老会
に出席されました。当日
は、和歌山教会のアレキ
セイ間兄にマジックを披
露していただきました。



こどものための

七五三感謝祷

名古屋教会

11月16日(日)に「七五三」にちなんで小



学生までのお子さんたちをお招きしたところ、15名も集まって大変にぎやかな会となりました。

聖体礼儀の最後には日本語、スラブ語、ルーマニア語で「いくとせも」を祈りました。

大阪教会

11月9日(日)に「七五三(こどものための)



感謝祷」を行いました。子供7人の参祷でした。「千歳(いくとせも)袋」に入ったお菓子をプレゼント。祈祷後には日曜学校を開き、聖書の話に耳を傾けました。

神戸教会の紹介

1 エキゾチック!世界宗教寺院めぐり 実行距離 約3.1km

- 1 聖母マリア教会
- 2 聖母マリア教会
- 3 聖母マリア教会
- 4 聖母マリア教会
- 5 聖母マリア教会
- 6 聖母マリア教会
- 7 聖母マリア教会
- 8 聖母マリア教会
- 9 聖母マリア教会
- 10 聖母マリア教会
- 11 聖母マリア教会
- 12 聖母マリア教会
- 13 聖母マリア教会
- 14 聖母マリア教会
- 15 聖母マリア教会
- 16 聖母マリア教会
- 17 聖母マリア教会
- 18 聖母マリア教会
- 19 聖母マリア教会
- 20 聖母マリア教会

地方自治体と阪神、阪急が共同して主催して作った「阪急・阪神沿線 観光あるき」というパンフレットに神戸教会が掲載されました。阪急の駅などに置かれています。

六甲学院 神戸教会見学

8月3日(日)、六甲学院中学の二年生の生徒



さんが、地理の校外学習の一環で神戸教会に来られ、聖体礼儀の最後の部分を見学した後、藤神父が正教会について説明しました。生徒さんは「なぜ秘蹟(機密)は七つなのですか」など次々と鋭い質問をしていました。

ロシア兵士墓地祈禱



泉大津 9月28日(日)



松山 11月3日(月)

名古屋教会主催で「正教会とラフマニノフ」

名古屋教会は、大阪教会で行われた教区主催の冬季セミナーに講師として迎えたマトフエイ土田兄にお願いして、セミナー翌日の午後六時半からセミナーとほぼ同じ内容でコンサートを開催しました。名古屋中心部栄地区にある音楽専用の貸しホールには、半数以上が一般からの参加の九十人近くの来場者を集めました。



一般参加者の多くは信徒の勧誘によるものですが中日新聞に依頼して掲載された宗教ペーシの行事案内を見て申し込んだ方もたくさんおられました。



西日本主教教区 これからの活動予定

○教会代表者懇談会○

日時 2015年5月6日(水・祝) 13時～15時 予定

場所 大阪ハリストス正教会

趣旨 西日本の教区内の各管轄区の教会から代表者にご集っていただき、各教会の情報交換、意見交換をしつつ、これからの教区の活動について、特に新設される「西日本教区センター」の有効利用について、話し合いたいと思います。



○「教区会議」・西日本教区センター成聖式○

場所 京都ハリストス正教会

日時 2015年6月19日(金) 教区理事会

6月20日(土) 教区会議／前晩禱

6月21日(日) 主教聖体礼儀／教区センター成聖式／祝賀会



ダニエル府主教座下、セラフィム大主教座下をお迎えして、聖体礼儀に引き続き西日本教区センター成聖式を行う予定です。都合により、教区会議は前日の土曜日に開催いたします。

表紙の話

「府主教セルギイ座下ご永眠七〇年を記念して

今年、二〇一五年は、戦後七〇周年に当たります。すなわち、使徒聖ニコライの後継者であるセルギイ府主教座下がご永眠して七〇年目の年である。これを記念して、セルギイ府主教の生涯について、少しだけ、振り返ってみたい。

生い立ち

一八七一年ロシアのノブゴロドの近くのグージ村で長司祭の次男として生まれた。本名はゲオルギイ・アレクセーヴィチ・チホミロフといった。

神学校を卒業後、サンクト・ペテルブルグ神学大学に入学。二十四歳で修道の誓いを立て、修道司祭となる。名前もセルギイに変わった。神学博士号を取得した後、大学総長となった。ロシア皇帝ニコライ二世の痛悔司祭も勤めたと言われている。

来日

一九〇八年、聖ニコライの後継者となるべく京都の主教というタイトルで

渡来。三十七歳の時だった。来日したセルギイ座下はすぐに日本各地を熱心に巡回し、各教会の牧会・宣教に力を注いだ。

ロシア革命

聖ニコライの永眠をみとり、これから日本正教会をさらなる高みに牽引していくとした矢先、一九〇七年、ロシア革命が起きる。日本正教会もセルギイ座下自身も、精神的な苦痛と経済的困難に悩まされた。

関東大震災

そして、さらなる苦難が襲いかかった。関東大震災で日本正教会の中心的存在であるニコライ堂が損壊したのである。

復興するにも母なるロシアからは当然、経済的支援は得られず、日本正教会だけで何とかするしかなかった。セルギイ座下は、日本全国を四〇数回にわたり巡回して歩き、復興募金を集めた。訪問戸数は約二千七百戸に及び、ほぼ日本中の信徒を訪れたと言っても過

言ではない。こうして血の滲むような努力の結果、一九二九年(昭和4年)十二月十五日にニコライ堂は復興した。

ニコライ堂復興記念

今回の表紙を飾ったのは、その復興を記念して作成された絵葉書である。聖ニコライの写真と旧ニコライ堂がデザインされたものが一枚(上段)。よく見ると背景は廃墟を思わせるイラストとなっている。そしてそれと対になった、セルギイ座下と復興したニコライ堂の絵葉書である(下段)。

第二次世界大戦

しかし、セルギイ座下にとつて最も過酷な状態となってしまう。戦時中、主教として日本正教会を治めることを剥奪され、ニコライ堂から離れることを余儀なくされたのである。そして一九四五年八月十日(終戦のわずか5日前)、祖末なアパートの一室で誰にも看取られずに永眠したのである。(水口記)